

高知県の野鳥についての覚え書き

- 1) 日本野鳥の会高知支部
- 2) わんぱーくこうちアニマルランド

熊沢秀雄¹⁾・渡部 孝²⁾
黒岩哲夫¹⁾・中西和夫¹⁾

高知県には、自然史博物館などの野生動物の記録を総合的に管理できる研究機関がない。しかし野鳥については、日本野鳥の会会員をはじめ多くの人の努力により、貴重な記録が積み重ねられている。本稿ではこうした記録の中から、三つの話題を取り上げる。

第1節は海鳥の記録である。高知市の動物園「わんぱーくこうちアニマルランド」には、ケガや衰弱などで偶然に保護された鳥が持ち込まれる。四国本島では普通に見られない、外洋ないし島嶼部を主要な生息域とする海鳥が保護されることもある。最初に、「外洋性」の海鳥の記録を紹介する。当動物園以外の記録については資料¹⁻³⁾を参照して頂きたい。また、海鳥の同定や分布を知るには図鑑⁴⁻⁶⁾が有用である。

図鑑⁶⁾に基づき、本稿でリストアップされている海鳥の分布を説明しておく。オオミズナギドリは日本各地の島で繁殖している。ウトウやウミスズメは樺太、千島、アリューシャン列島などで繁殖し、冬に南下する。アナドリとシロハラミズナギドリは小笠原諸島などで、それぞれ初夏および早春に繁殖する。セグロアジサシは赤道域に分布するが、夏には北上し、小笠原諸島や中南部琉球諸島などで繁殖する。トウゾクカモメは5-10月に北極圏で繁殖するが、太平洋の場合は、11-3月にハワイ諸島や、はるかオーストラリア南東岸まで移動する。徳島県日和佐町で1987年10月に記録があり³⁾、本稿の例と季節が一致している。ハシボソミズナギドリはオーストラリア南東岸で繁殖する。5月頃から太平洋西部を北上し、ベーリング海などで

夏を過ごし、秋には太平洋東部を南下する。ヒメシロハラミズナギドリは南米チリ沖に繁殖地があり、日本近海で見られるのは6-9月とされる。このような海鳥の季節ごとの移動を念頭に置けば、保護された鳥の記録も良く理解できるかもしれない。

第2節ではタカ（鷹）の渡りを取り上げる。日本に春やって来て秋に南に帰る「夏鳥」は、日本と東南アジアを直接結び付けている。タカ的一种であるサシバもこのような渡りをし、高知市はサシバの通り道となっている。秋の渡りでは、夏の間繁殖増加した個体群が短期間の間に大挙して南に渡る。このサシバの群れは高知から九州を経て島伝いに南下し、遠くフィリピンにまで至る個体もあるという。一方、少数ながら高知で越冬する個体も知られている²⁾。春の渡りは秋に比べ個体数も少なく、それほど短期間に集中していないので、秋の渡りほど良く調べられていない。しかし、高知では熱心なバードウォッチャーたちが毎年春と秋に観察を続けており、かなりの資料が蓄積されている。ここではその一部を紹介する。

第3節では高知の県鳥であるヤイロチョウを取り上げる。本種も夏鳥である。日本野鳥の会高知支部は、高知県からの依託により1990-1992年の3年間、高知野生生物研究会と合同でヤイロチョウの調査を行なった。本稿ではその時の記録を基礎に、ヤイロチョウの繁殖習性の一部を紹介する。これ以前の記録としては沢田⁷⁾の卓越した報告があり、今回紹介する記録はほぼこれを追認する結果となっている。なお

この時、日本野鳥の会本部も参加して合同調査が行なわれた。その成果の一部は、高知県におけるヤイロチョウ繁殖地の地形上・植生上の特徴をテーマとして報告されている⁸⁾。さらに、ヤイロチョウに関する多くの貴重な情報が地元熱心な観察家のフィールドノートの中に眠っていることを付記しておく。

本稿の第1節は渡部が、第2節は黒岩が、第3節は中西が執筆し、全体を熊沢がまとめた。

1. 保護された外洋性海鳥の記録

動物園の責務である自然保護活動の一環として、当園では傷病野生鳥獣の保護治療を開園以来行っている。県内の中心部に位置する当園には、毎年多数の野生鳥獣が保護されてくる。それらの中には、通常のフィールド観察で確認する機会の少ない外洋性の海鳥が含まれており、今回1984年度から1996年度までの13年間の記録をとりまとめた。

(1) 保護状況

保護鳥獣は、すべて一般市民や県・各市町村の担当課職員などからの直接持ち込みにより、野生復帰を前提として受け入れられている。1984年度の保護総数は19種45点であったが、年々その数は増加して1996年度には54種229点となり、この13年間で115種1,620点となっている。このうち、鳥類の割合が圧倒的に高く、全

体の約90%を占めている。

(2) 保護結果

外洋性海鳥として、ミズナギドリ目ミズナギドリ科のシロハラミズナギドリ・ヒメシロハラミズナギドリ・アナドリ・オオミズナギドリ・ハシボソミズナギドリ、チドリ目トウゾクカモメ科のトウゾクカモメ、同目カモメ科のセグロアジサシ(図1)、同目ウミスズメ科のウミスズメ(図2)・ウトウが保護され、総数は2目4科9種44点であった(表1)。このうち、オオミズナギドリ・ハシボソミズナギドリ・セグロアジサシを除く種は、それぞれ1ないし2点のみの保護であった。保護点数の多かったこの3種についてみると、高知県蒲葵島で繁殖が確認されているオオミズナギドリは、5月から11月と長期間にわたり保護されているが、高知沖でその繁殖が確認されていないハシボソミズナギドリとセグロアジサシの2種は、それぞれ約2ヶ月の限定された期間内に保護されている。

(3) 考察

保護された外洋性海鳥はほとんどが衰弱して飛翔できない状態にあり、自力で採食することもできないことが多い。強制給餌などにより体力を回復する場合もあるが、野生復帰ができるのは50%以下である。また、衰弱の外因は台風などの暴風雨であることが多く、1988年6月の



図1 1993年夏に保護されたセグロアジサシ。



図2 1995年冬に保護されたウミスズメ。

表1 わんぱくこうちにおける外洋性海鳥の保護記録

年月日	種	数	保護場所	年月日	種	数	保護場所
84 11 6	▼	1	浦戸湾	93 7 28	◆	1	高知市新本町
85 8 12	○	1	高知市神田	28	◆	1	土佐郡土佐山村
14	○	1	高知市越前町	28	◆	1	土佐郡大川村
10 19	●	1	高知市御豊瀬	29	◆	2	長岡郡大豊町
11 13	●	1	高知市万々	30	◆	2	須崎市新町
87 5 28	◎	1	高知市介良	30	◆	1	土佐郡土佐山村
88 6 3	◎	2	高知市仁井田	8 1	◆	1	土佐郡大川村
4	◎	2	吾川郡春野町	4	◆	1	長岡郡大豊町
4	◎	1	高知市帯屋町	5	◆	1	吾川郡吾川村
4	◎	1	高知市深谷	10	◆	1	高知市弘化台
11 17	●	1	高知市横浜	14	◆	1	高知市種崎
89 5 21	◎	1	南国市十市	9 5	●	1	高知市旭天神町
6 15	◎	1	吾川郡春野町	94 8 15	◇	1	高知市御豊瀬
17	●	1	吾川郡春野町	95 1 30	■	1	大阪高知フェリー航路
90 5 19	◎	1	南国市十市	96 3 25	▽	1	大阪高知フェリー航路
19	◎	1	南国市十市	4 26	◎	1	高知港
19	◎	1	不明	5 19	◎	3	香美郡夜須町
93 5 2	●	1	大阪高知フェリー航路	20	◎	1	室戸市室戸岬町
6 3	◎	1	土佐市宇佐町	11 12	▲	1	吾川郡春野町

▼アナドリ, ○ヒメシロハラミズナギドリ, ●オオミズナギドリ, ◆セグロアジサシ,
◎ハシボソミズナギドリ, ◇シロハラミズナギドリ, ■ウミスズメ, ▽ウトウ,
▲トウゾクカモメ

ハシボソミズナギドリや1993年7-8月のセグロアジサシのように、その被害が多数羽に達することもある。この時には、当園以外の施設にも個体が保護収容されており、また、多数の死体が発見されている。外洋性海鳥にとって、風は生活のために無くてはならない存在であるが、その生活に適応したため特殊化し、脚力がきわめて弱い。そのため、地上に降りて暴風を回避することができず、一度巻き込まれてしまえばその被害は多大なものになると思われる。

外洋性海鳥はフィールドでの観察が困難であり、種や個体の確認は保護または死体収容によることが多い。彼らの野外での生態を知る上において、傷病野生鳥獣の保護治療を恒常的に行っている当園の役割は大きいと思われる⁹⁾。今後とも、一羽でも多くの個体が野生復帰できるよう努力するとともに、継続して記録を残していきたいと思う。

2. 高知市におけるタカの渡り

タカの渡りは夜間に渡る小鳥とは異なり、日中に行われる。ある程度集中するルートも知られてきており、日本各地で主に秋の渡りの観察が行われている。高知県では、日本をはじめとする極東の限られた地域で繁殖をするサシバの渡りが集中して観察される。これは日本列島の太平洋側を渡るものである。ハチクマも日本各地で繁殖しているが、サシバは東南アジアを、ハチクマは大陸を越冬地としていて渡りのルートが異なるため、高知市ではハチクマの渡りは数百羽しか観察されていない¹⁰⁾。その他に高知県では、少数であるがノスリ、オオタカ、ハイタカ、ツミ、ミサゴ、ハヤブサ、チゴハヤブサ、チョウゲンボウなどのタカの渡りが見られる。日本野鳥の会高知支部では、有志が毎年タカの渡りの観察を行っており、徐々にその概要が明らかになってきた。観察は双眼鏡などを用いての目視による。以下、高知県でもっとも渡りが見られるサシバについて紹介する。

サシバは雄が全長47cm～雌が51cm，翼開長102.5cm～115cmで，ハシボソガラス程度のワシタカ科に属する中型のタカである。繁殖地は極東の限られた地域，すなわち，ロシアのアムール地方南部，ウスリー地方，中国の東北地方から河北省，日本の東北地方から九州で，朝鮮半島北部でも繁殖していると思われる。越冬地は南西諸島，台湾，中国南部，東南アジアなどである¹⁰⁾。渡りの飛翔では汎翔（上昇気流に乗り，高度をかせぐ）と滑翔（グライダーのように滑り，移動する）を繰り返す。この飛び方は，4千km前後の渡りを乗り切るために，エネルギー消費を出来るだけ少なくするためと考えられる。上昇気流には，風が山に当たることにより起きる斜面上昇気流と，太陽の熱により地表が暖められて発生する熱上昇気流がある¹¹⁾。早朝時や曇天などで上昇気流がつかみがたい時は，はばたき続けるため，エネルギー消費が多くなる。また，海上では落下すると死亡するので，できるだけ島伝いに渡ると考えられている。

（1）秋の渡り

秋には繁殖を終え，成鳥・幼鳥まじえて越冬地へと旅だてて行く。渡る期間は年ごとに多少の変動があるが，高知市では9月20日前後から10月20日前後までの約一ヶ月間である。渡りのルートの中は高知市の南北20km以上に広がっており，地形や気象条件に左右されながら，そのルート内で様々なコースをとるものと思われる。そのため，高知市を便宜上南北2コースに分け，渡りの傾向を把握するよう努めている。観察地点として，北部の鴻ノ森，南部では烏帽子山が知られていたが，最近では，北部は観月坂や行川，南部は潮見台，五台山，神田などで観察を行っている。それらの観察を総合的に見ると，毎年南北の両コースを合わせ，2万羽前後のサシバが高知市上空を渡っていることが明らかになってきた¹²⁻¹⁴⁾。ここでは，日本野鳥

の会高知支部のタカの渡りを観察しているグループ（たかみぐみ）による，1997年の秋の渡りの観察結果の一部を示す（図3）。この結果は，高知市の複数の観察地点のうち，ライン上にある南・中・北部の3点を選び，それらの観察数を重複を除いて合計したもので，その総数は21,115羽であった。

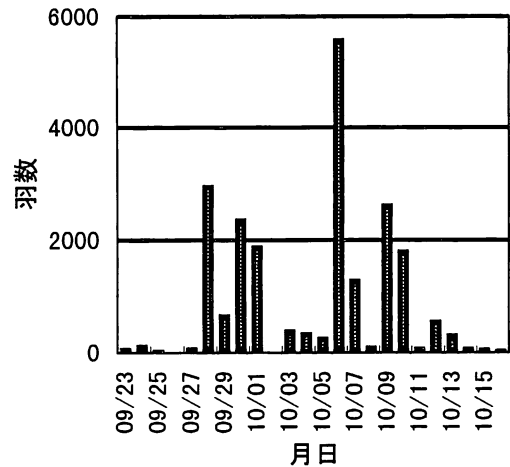


図3 1997年高知市におけるサシバの秋の渡り観察個体数。9月26日と10月2日は，雨のため観察していない。

（2）春の渡り

春には繁殖のため越冬地から繁殖地へ戻ってくる。春の渡りは全国的にもほとんど分かっておらず，秋と比べると長期間で，あまり群れにならず，ほぼ秋と同じルートを逆に渡っているものと思われる¹⁰⁾。高知市では，春も秋と同様にまとまったサシバの渡りが観察されることが明らかとなり，今まで主に北部を中心に観察を行ってきた。渡りの期間は3月下旬から5月下旬までと，約二ヶ月におよぶ。渡りのコースは秋ほどは解明されていないが，北部はおおよそ明らかになった。今後は北部と合わせて，南部での継続的な観察が必要となってきている。渡りのパターンは顕著で，3月の終わりから4月の初めに一日における渡りのピークがあり，その後かなりの個体が渡り続けた。1995

年のピークは3月31日で1,498羽、観察総数は39日間で6,518羽、1996年は4月1日がピークで2,373羽、観察総数は34日で8,229羽、1997年は3月28日に2,079羽のピークがあり、観察総数は36日間で6,863羽であった。また、1997年の観察では、5月に入ると前年生まれの子鳥の渡りが見られた¹⁵⁾。これは、若鳥は繁殖に参加しないため、成鳥より約一ヶ月遅れて渡るものと思われる¹⁰⁾。

(3) 繁殖地・渡りの休息地の保護

サシバは高知県でも繁殖しており、高知県の代表的な夏のタカである。また、高知県以東で繁殖したサシバの少なくとも2万羽は高知市を通過し、4千km前後離れた越冬地に向かっている。渡りは天候に左右されながら、十数日かけて行われていると考えられる。また、高知市では朝の6時台に、秋は百羽を越える時立ち（たかみぐみの観察）、春は667羽の集団の移動¹⁵⁾が観察されている。良い環境は彼らの命を支えるものであり、繁殖地の環境と同様に、渡りのルート上の休憩地の環境も重要である。渡りの

ルート上にある高知市および高知県は、明らかに渡りの重要な位置の一つを占めており、サシバに代表されるタカの存続にとって大切な地域である。

3. ヤイロチョウの繁殖行動

ヤイロチョウはその名のとおりカラフルな鳥で、頭部は黒色、茶色、褐色の縞模様、背は緑色、腹は褐色で、赤い下尾筒を持ち、雌雄同色である。体長約20センチメートルのずんぐりした身体つきをしており、夏鳥として本州中部以南の山地の森林に渡来する。日本における定期的な渡来地や繁殖地は少なく、個体数も少ないと考えられている。高知県の四万十川上流の幡多地方は定期的な渡来地であることから、高知県の県鳥に指定されている。

渡来した初期には尾根筋の木の梢などでよく囀るが、繁殖に入ると囀ることは少なくなる。また、深い森林に営巣することから、繁殖行動を観察することは難しい。杉の葉などで巧みにカムフラージュをほどこした巣を谷筋近くの地上に作り、4-5個の卵を産む。抱卵は2羽の



図4 巣立ち雛に給餌する親鳥。

親鳥が交互に行う。抱卵中の親鳥は、頭だけが見えるよう巣の中に座るため、頭の茶色の部分が杉の葉の色とマッチし、巣を一段と見つけにくいものになっている。巣に飛来するコースや飛去するコースはほぼ一定している。巣への飛来は、木の枝を移りながら徐々に巣に近づき、巣の直前の枝から巣に移る。飛去は、巣から一挙に飛び去っていく。

卵は14-16日で孵化する。雛にはオス・メスが共に給餌する。孵化後数日は親鳥が巣に入り、雛を温めることがある。給餌内容はほとんどがミミズで、昆虫やサワガニなどを運ぶこともある。一回に運ぶ餌のミミズの量は1-8匹である。採餌はもっぱら地上で行い、嘴で石をのけたり、足で落ち葉をかきわけてミミズを探す。ミミズを見つけるとすばやく嘴でつついてくわえ、地上に何度も叩きつけて弱らす。ミミズをくわえては次のミミズを探し、再びミミズを見つけるとくわえていたミミズをすばやく地上に置き、一匹目と同様に捕らえる。その後、そのミミズをくわえたままで先ほど置いたミミズの所に戻り、地上に置いていたミミズをくわえ、また次のミミズを探すという動作を繰り返す。給餌間隔は、最初は1時間近くであるが、雛の成長に伴って短くなり、15分ほどとなる。給餌は、親鳥が餌をくわえて巣の入り口にとまり、ミミズを巣の前に置き、頭を巣の中に突っ込むようにしてミミズを一匹づつ与えて行なう。雛は巣から尾端をつき出すようにして白い光沢のある袋状の糞を排泄し、それを親鳥が嘴でくわえて運び去る。

雛は孵化後14-16日で巣立する。親は巣立ち後少なくとも2週間は雛に餌を運ぶ(図4)。

引用文献

1. 高知県 (1986) 高知県の鳥. 高知県.
2. 高知県 (1996) データベース高知県の野鳥. 高知県.
3. 高知新聞社 (1995) 四国の野鳥. 高知新聞企業, 高知市.
4. 高野伸二 (1985) フィールドガイド日本の野鳥. 日本野鳥の会, 東京.
5. 高野伸二 (1992) カラー写真による日本産鳥類図鑑. 東海大学出版会, 東京.
6. Harrison, P. (1985) Seabirds, an identification guide. (Revised ed.) Christopher Helm Ltd., London.
7. 沢田佳長 (1984) 幡多の動物概説, ヤイロチョウの繁殖習性の観察. 高知県立宿毛高等学校研究紀要, 2: 1-10.
8. 藤田剛・樋口広芳・沢田佳長・磯谷達宏 (1992) 四国南西部におけるヤイロチョウ *Pitta brachyura* の生息状況と環境選択. 平成3年度特殊鳥類調査報告書, 9-29, 日本野鳥の会, 東京.
9. 高知市 (1996) あゆみ 高知市立動物園からわんぱくこうちアニマルランドへ. 高知市.
10. 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男 (1995) 図鑑日本のワシタカ類, 文一総合出版, 東京.
11. マクファーランド, D. (1993) オックスフォード動物行動学事典. どうぶつ社, 東京.
12. 鷹の渡り観察組 (1995) '94サシバの渡り観察記. しろぺん (日本野鳥の会高知支部報), 98号.
13. 西村俊彦 (1996) サシバの渡り観察データ集計. しろぺん (日本野鳥の会高知支部報), 111号.
14. 黒岩哲夫 (1997) 1996秋のサシバの渡り観察結果について. しろぺん (日本野鳥の会高知支部報), 122号.
15. 黒岩哲夫・西村俊彦・橋本裕子・吉本海男 (1998) 高知市における春期のサシバの渡り. *Strix*, 16 (印刷中).